Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-01

「子どもと地域が育つ小規模特認校」の研究

久保，富三夫

(Citation)
「小さな学校」研究:1-22

(Issue Date)
2019-04-20

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005907

日本教育学会近畿地区研究会
2019 年 4 月 20 日（土）神戸大学

「子どもと地域が育つ小規模特認校」の研究

久保富三夫（立命館大学大学院教職研究科）

１．「小規模特認校」とは何か

（１）特認校：5 種類の学校選択制（自由選択制、ブロック選択制、隣接校区選択制、特認校制、特定地域選択制）のうちの一つ。

従来の通学区域は残したままで、特定の学校について、通学区域に関係なく、当該市(区)町村内 のどこからでも就学を認めるもの。

（２）小規模：その規模に明確な基準はない。

報告者は、小学校、中学校ともに、2010 年度において在籍数 240 名以下の学校＜当時の学級編制の標準である 40 名×6 学級＞を「小規模校」とした。小学校では各学年単学級、または、一部の学年では 2 学級の学校、中学校の場合には、各学年 2 学級の学校が「小規模」の上限になると考えた。（大きめに設定）

（実際には、小学校 30×6 学級＝180 名、中学校 30×3 学級＝90 名、以下が適切ではないか？）

（３）文部科学省はもちろん都道府県教育委員会においてもその所在が正確に把握されているわけではない。なぜなら、同制度は法令に明定されたものではないからである。

また、必ずしも「小規模特認校」という呼称を用いているわけではない。「自然いっぱいオープンすくうる」（秋田市）や「生き生き体験オープンスクール制度」（広島市）、「海っ子山っ子スクール～小規模特別転入学制度～」（福岡市）などさまざまである。

（４）教育委員会規則で制度規定

○○市小規模特認校指定実施要綱、○○市小規模特認校制度要綱など

２．報告者と小規模特認校研究

（１）和歌山大学教育学部勤務（2008 年度～2014 年度）

★教育実習委員、教育実践総合センター長

へき地複式教育実習（2 月中旬から 2 週間）での「小さな学校」訪問・見聞

★2013 年度～2014 年度

◎「小規模特認校の教育的意義とその実現のための要件に関する研究」（独立行政法人日本学術振興会、科学研究費・挑戦的萌芽研究）

・「「小規模特認校」制度の先進事例に関する調査研究」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』第 24 号別冊、2015 年 3 月、39～50 頁。

・日本教育経営学会第 55 回研究大会自由研究発表、2015 年 6 月 20 日、東京大学（帝塚山学院大学勤務）

「小規模特認校制度の教育的意義とその実現のための要件～小規模特認校訪問調査からの考察～」

・「小規模特認校の教育的意義とその実現のための要件に関する研究」『人間科学部研究年報』第 17 号、帝塚山学院大学、2015 年、32～46 頁。

・「小規模特認校の教育的意義とその実現のための要件に関する研究（そのⅡ）～地域住民の学校教育活動への参加と地域振興の視点から～」『立命館教職教育研究』特別号、2016 年 2 月、55～64 頁。

★2018 年度～2020 年度

◎「小規模特認校における学校運営協議会設置の有効性に関する研究」（科学研究費・基盤研究（C））

３．その歴史と現況

（１）歴史

1977 年、札幌市において、「生徒数が減少して廃校の危機にあった札幌市郊外の山間部へき地小規模校の存続を願う地域住民や学校関係者の要望に応え、併せて、自然豊かな小規模校への通学を希望する市街地児童生徒（親）に応えるために、札幌市教育委員会が校区外通学と小規模性保持という特別な許可を与えて、盤渓、駒岡、有明の 3 小学校で始まった」（門脇 2005：35-36）。その後、21 世紀に入ってから、通学区域の弾力化の中で、小規模校を地域に存続させることを主たる目的として広がり、**門脇正俊による 2003 年度の調査では 26 県・241 校（小：216 校、中：25 校）**において制度の導入が把握されている（門脇 2005：41）。

門脇正俊「小規模特認校制度の意義、実施状況、課題」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第 55 巻第 2 号、2005 年 2 月。

（２）現況・・・配布資料参照

◎2018 年度の小規模特認校総数…　４９２校（小学校　４０２校、中学校　９０校）

うち、義務教育学校前期課程８、後期課程９

※義務教育学校は前期課程を小学校、後期課程を中学校として数えている。

※2018 年度において休校中の学校、あるいは、特認児童生徒の募集停止中の学校は除く。

※分校も 1 校として数えている。

◎都道府県別校数順

①鹿児島県　114 校（小 95、中 19）　　うち、義務教育学校後期課程 1

②北海道　　55 校（小 44、中 11）

③栃木県　　35 校（小 30、中　5）　　うち、義務教育学校前期課程 2、後期課程 2

④福岡県　　23 校（小 18、中　5）

⑤宮崎県　　19 校（小 15、中　4）

◎2019 年度に小規模特認校になる学校（久保が把握している学校のみ）

館林市立第四小、飯能市立奥武蔵小、笛吹市立芦川小、岸和田市立東葛城小、

はびきの埴生学園（前・後期課程）、猪名川町立楊津小、猪名川町立大島小

（３）推移（2010 年度～2014 年度）　　2014 年度小規模特認校数・・・444 校（小 368、中 76）

①2014 年度の在籍数が 2010 年度に比べて増加している学校

136 校：30.6%（小 107：29.0%、中 29：38.7%）

②1.2 倍以上に増加している学校　　51 校：11.5%（小 37：10.0%、中 14：18.7%）

③在籍数が同等以上の（5 年間で減少していない）学校　161 校：36.3%（小 126：34.1%、中 35：46.7%）

◎過疎化・少子化が激しい地域におけるこの事実は同制度の有効性（在籍者数維持・増加）を示している。

④在籍者数が 5 年間で減少している学校　　283 校：63.7%（小 243：65.9%、中 40：53.3%）

⑤0.8 倍未満に減少している学校　　167 校：37.6%（小 146：39.6%、中 21：28.0%）

◎制度導入が直ちには在籍数の維持・増加に繋がらない厳しい現実を示している。全国的には 2014 年度公立小・中学校在籍児童生徒数は、2010 年度のそれに比して、95.7%（小 94.4%、中 98.7%）であるから、それを大きく下回って 0.8 倍未満（80%未満）に減少しているということは、激しい過疎化・少子化が進行していると言える。

◎制度導入により地域に学校を存続させることは容易なことではなく、それは、門脇論文において小規模特認校として把握されている 241 校（2003 年度）のうち 44 校（18.3%、小 38、中 6）が 2013 年度までに閉校となっていることからもわかる。制度導入により、児童生徒数を増加させ、地域に学校を存続させるためには幾つかの要件を必要としている。

４．報告者が訪問した学校・地域と訪問時期…（　）内は小規模特認校制度開始年度　　33 校（小 30、中 7）

★札幌市立有明小学校（1977）：2014 年９月（72 名）　**18 年度在籍者 98 名**

★札幌市立駒岡小学校（1977）：2014 年９月（83）　**18 年度 86**

★札幌市立盤渓小学校（1977）：2014 年９月（113）　**18 年度 119**

★札幌市立福移小・中学校（1985）：2014 年９月（小 97 名、中 59）　**18 年度小 84、中 51**

★宇都宮市立城山西小学校（2004）：2014 年４月（94）、14 年８月、18 年７月、19 年４月　**18 年度 102**

★宇都宮市立清原北小学校（2004）：2014 年８月（119）、18 年７月　**18 年度 121**

★近江八幡市立沖島小学校（2008）：2014 年９月（11）　**18 年度 19**

★甲賀市立鮎河小学校（2012）：2014 年７月（20）・・・2018 年度末で閉校

★甲賀市立甲南第三小学校（2012）：2014 年７月（49）　**18 年度 43**

★甲賀市立朝宮小学校（2012）：2014 年８月（31）　**18 年度 27**

★甲賀市立多羅尾小学校（2012）：2014 年８月（9）　**18 年度 8**

★大津市立葛川小・中学校（2018）：2018 年７月、2019 年３月　**CS（2017～）**　**18 年度小 26、中 12**

★宇治市立笠取小学校（2001）：2014 年６月（18）、18 年８月　**18 年度 17**

★京田辺市立普賢寺小学校（2007）：2016 年２月（71）、18 年８月、19 年３月　**CS（2015～）18 年度 79**

★高槻市立樫田小学校（2003）：2014 年６月（52）、18 年８月　**18 年度 51**

★泉南市立東小学校（2007）：2013 年 11 月（65）、14 年 12 月、18 年８月　**18 年度 70**

★和泉市立南横山小学校（2006）：2013 年 10 月（86）、14 年６月、18 年８月、19 年２月、19 年３月 **18 年度 93**

★泉佐野市立大木小学校（2008）：2014 年７月（38）　**18 年度 51**

★河内長野市立天見小学校（2000）：2014 年７月（62）、18 年８月　**CS（2012～）**　**18 年度 68**

★柏原市立堅上小学校（2006）：2014 年９月（84）堅上小学校訪問以来頻繁　**18 年度 82**

★柏原市立堅上中学校（2007）：2014 年９月（48）以来頻繁（学校評議員）。堅上幼も特認園。**18 年度 35**

★三田市立母子小学校（2012）…2014 年６月（9）　**18 年度 16**

★神戸市立六甲山小学校（2002）：2014 年６月（46）、14 年７月、18 年８月　**18 年度 45**

★神戸市立藍那小学校（2012）：2014 年６月（24）、18 年 12 月、19 年１月、19 年３月　**18 年度 46**

★西脇市立双葉小学校（2007）：2014 年６月（25）、18 年８月　**18 年度 31**

★養父市立建屋小学校（2018）：2019 年１月　**18 年度 45**

★福岡市立能古小学校（2005）：2014 年９月（70）　**18 年度 72**

★福岡市立能古中学校（2005）：2014 年９月（53）　**18 年度 53**

★福岡市立勝馬小学校（2005）：2014 年９月（26）　**18 年度 26**

★うるま市立彩橋小学校（2012）：2014 年 12 月（104）　**18 年度 80**

★うるま市立彩橋中学校（2012）：2014 年 12 月（73）　**18 年度 46**

★名護市立久志小・中学校＜緑風学園＞（2012）：2014 年 11 月（小 90、中 63）、18 年 12 月、19 年２月
CS（2018～）　18 年度小 108、中 48

★名護市立屋我地小・中学校＜屋我地ひるぎ学園＞（2016～）…2018 年 12 月　**CS（2018～）**
18 年度小 89、中 38

※コミュニティスクール（ＣＳ）の数…3.600 校（2017 年４月１日）から、1,832 校増の 5,432 校（2018 年４月１日現在）。
学校設置者…全体の３割にあたる 532 市区町村及び 18 道府県の教育委員会が導入。前年の 367 市区町村及び 11 道県から約 1.5 倍。

※文科省では 2016 年４月１日現在の「コミュニティスクールの指定状況」を最後に指定校名を公表していない。初等中等教育局参事官（学校運営支援担当）付に尋ねると、」公表の役割を終えたこと」、「働き方改革」に関わり、指定校の公表の予定はないとの回答。

５．教育的意義など

（１）小規模校が廃校にならずに地域に存続することにより、小規模校・少人数学級（多くが定員 20 名以内）での豊かな学びの機会を校区の子どもたちに保障できる。訪問調査での校長のお話では、1 学級 15 名くらいの人数が学力保障と集団生活の面での支持が高かった。

★高槻市立樫田小学校、神戸市立藍那小学校は定員 10 名、神戸市立六甲山小学校は 12 名、
泉佐野市立大木小学校は 16 名、京田辺市立普賢寺小学校は 18 名。

★宇都宮市立城山西小学校、同清原北小学校、和泉市立南横山小学校は 20 名。定員 20 名の学校が多い。

★名護市立緑風学園（小・中）と屋我地ひるぎ学園（小・中）は 30 名。

（２）極小規模校あるいは極小規模化しつつある学校に特認児童生徒が入学・転入学することにより、小規模校・少人数学級でありながら、かつ集団としての「最低規模」を確保することができる。あるいは、複式学級編成が解消され、学年単級編成が可能になる（複式の場合でも、各学年の人数が 1～2 名ではなく数名となる）。

ただし、複式学級については、これを単純に否定的に見ることは避けたい。ある条件のもとでは、高い教育力を発揮することもある（例：福岡市立勝馬小学校、甲賀市立多羅尾小学校、和歌山大学教育学部附属小学校）。

（３）学校を舞台とした地域住民・保護者相互（地域住民間・保護者間も）の交流の場が確保される。運動会や学芸会などの学校行事や次の（４）で述べるような農業体験を始めとした様々な体験活動、教育活動の企画・実行、そして、登下校時の安全確保の活動等を通じた地域住民・保護者の協働の場としての学校が確保される。

（４）制度の存続・発展（魅力ある学校づくり）のために教育課程内外における地域資源（人、自然、歴史、芸能・文化、工芸・産業）の活用をめざした教職員と地域住民の目的意識的・継続的な共同の取り組みにより、豊かな教育活動を創り出すことである。当然、それは児童生徒の豊かな学びと成長につながる。

小規模でかつ自然・歴史・文化的環境が豊かであっても、制度を導入していない場合には、資源の活用と学校の存続とは直結しないので、地域住民がその活用、学校教育への反映を追求し続けることにはなりにくい。

それに対して、制度を導入している学校では、まず、導入に至る過程で地域住民による「〇〇学校の将来を考える会」等が結成され、廃校の危機や複式学級を解消するための方策が検討される。その運動の中で「地域の学校」「自分たちの学校」意識がさらに強化される。特認制度を導入することについての住民の意見調整（全戸対象のアンケート調査）、意思統一（会合での協議や署名活動）も必要である。それを経て、教育委員会への要請等が行われる。そして、制度発足後は、特認制度利用者を増加させるために魅力ある教育課程・教育活動の創出が求められ、それを担う地域ぐるみの高度の取り組みが必要となる（地域住民が持続的にできることは何か）。それができない場合には（地域住民の全面的協力を得られない教育活動では）、小規模特認校制度導入により一時的には児童生徒数が増加しても、それを中長期にわたって持続することは困難である。

（５）大規模校では「不適応」を起こしていた子ども、あるいは生き生きとした学校生活を送ることができていなかった子どもが、特認制度を利用することによって自己肯定観を高め、学力を向上させ、人間的にも成長を遂げた事実がたくさん存在する。そして、特認制度を利用した保護者の成長の事実も見られる。

（６）特認利用者が増加する一方で、本来の校区の児童生徒が増加しなければ、やがてほとんど、あるいはすべての児童生徒が校区外から通学する事態が起こる。そうならないように、また、地域おこしのためにも移住促進などに取り組むが、その際にも、学校、特に小学校がその地域に存在することは重要な条件となる。

６．その実現のための要件

（１）立地する環境（同一市内の他地域との差異が顕著なこと。自然環境・景観・人口密度・学校規模）

（２）自治体の人口規模による適切な特認校数

（３）通学手段（公共交通機関、スクールバス、コミュニティバスなど）　保護者による送迎：城山西、清原北

（４）転入学の可否

（５）中学校選択の可否（居住地の中学校のみ or 選択可能）

（６）１学級の児童生徒数（多くが 20 名まで）　「30 人、35 人だと、特認制度利用の意味がなくなる」

（７）地域の資源（自然、歴史、伝統、人間など）をフルに活用した魅力ある教育課程内外の教育活動の策定とその実践（地域住民と教職員の共同作業）

（８）学校教育活動を支援する多層な住民組織（小規模特認校ゆえの特別な教職員配置はない。普通の教員）

（９）不登校傾向の子どもや発達特性の強い子どもの受け入れについての地域住民・教職員の合意と力量形成

（10）放課後活動組織（城山西：こがし桜スクール、清原北：ＫＡＳＡ、樫田：かしんこクラブ、など）

（11）広報活動の方法（チラシ、ポスター、ホタル・星空観察会や祭りなどの諸行事、見学会、説明会）と担い手（教職員、地域住民、保護者）　城山西：古賀志の孝子桜まつり（2019 年 4 月 6・7 日、第 17 回）
藍那：うどんまつり（2018 年 7 月 22 日、第 10 回）

（12）保護者（特に特認利用）の学校づくりへの参画と校区・特認保護者の交流・協働

（13）校区への移住者促進（魅力ある学校づくり⇒児童生徒のほぼ全員が特認利用になる可能性）
城山西：NPO 法人「自然大好きｅ-街づくり」⇒こがし桜村、樫田：高槻市樫田地区空き家情報バンク制度（学校のすぐ近くに 29 区画の分譲地⇒完売⇒住宅）

７．子どもの成長の姿（保護者の成長に関わる記述には二重下線を付している）

●在校生　Ａさん（神戸市立藍那小学校 6 年生）

僕は、藍那小学校が大好きだ。藍那小学校の好きな所を二つあげる。

まず、藍那小学校は、自然がいっぱいである。山にかこまれて空気がおいしい。

豊かな自然をいかして、いろいろな体験をさせてくれる。全校キャンプでは、星野観察やハイキングをさせてくれる。家から見るよりも星が明るくてきれいだった。春にはいちご狩り、夏になると流しそうめんを食べる。秋にはいもほり、冬には雪合戦をする。学習畑で野菜を育てたり、田んぼでは米を育てる。その米や野菜や地域の人からもらった野菜が給食に出る。給食の中に出ると温かくておいしい。

そして二つ目は、全校のみんなが仲良しである。友達はとてもやさしい。勉強で分からない時には、やさしく教えてくれる。困っている時には、助けてくれる。重い物を持っていると気づいてパッと手伝ってくれる。もちろん僕だって友達を助ける。人数が少ないから全校のみんなで、一緒に活動することが多い。毎日給食は、みんなで一つの教室で食べる。高学年は低学年のめんどうを見ている。藍那小学校の生徒（ママ）は、みんなで協力しているから仲がいい。

僕は、自然がいっぱいで全校のみんなが仲が良い藍那小学校が好きだ。もうあと五ヶ月で卒業するのはさみしいけれど藍那小学校に来て本当に良かった。

●在校生　Ｂさん（大津市立葛川中学校１年、2018 年度大津市ＰＴＡ大会意見発表「大切にしたいもの」）

・・・・・・葛川の自然のなかで他の学校ではできないような学習体験ができます。しかし、葛川・久多では少子高齢化が進んでいて、小中学校に通う人数が年々減ってきました。しかも、今年度の小学１年生は入ってこないかもしれない状態で、このままだと廃校になる可能性もありました。ふるさと葛川・久多の学校を残したいということから、学校と地域で話し合いが行われ、今年度から私たちの学校は小規模特認校になりました。

その話を聞いたとき、私はあまり乗り気ではありませんでした。私は小学校３年生の時からずっと１人だったので、別の学年の人と生活していました。１人の授業の時は１人でもよかったし、あまり人が増えるのもいやでした。だいいち、人なんて来てもせいぜい１人、２人だと思っていました。ところが、小規模特認校になる前の年ということから新聞やテレビの取材がたくさん来て、それもあってか入学希望者はどんどん増えていきました。

そうこうしているうちに、体験入学の日がやってきました。少し楽しみにしていましたが、とても緊張しました。今思うと、そのとき一緒にいたのが今のクラスのみんなでした。そして、入学式。式が終わっても、まだみんなとはあまり話せず、緊張が続いていましたが、ジャンケンをきっかけに盛り上がり、しだいに打ち解けていきました。それから、私たちはどんどん仲良くなっておたがいの家に遊びに行ったりするようになりました。６年生の時には、もう友だちはいらないかも、と思っていました。でも、今では友だちから新しいことを教えてもらったり、いろいろなことを聞いたり知ったりして楽しい毎日を送っています。やはり友だちはたくさんいたほうがいいと今は思います。今の友だちはもちろん、これから新しくできる友だちとも仲良くして友だちとの時間を大切にしたいです。・・・・・・私たちの学校では、数年前から葛川・久多を活性化する取り組みを行っています。その中の一つに「ＫＴふれあいの輪」というものがあります。これは、小学校５、６年生、中学生、地域の人が地域の支所などに集まり、葛川・久多のこれからのことについて話す会のことです。この会の中で、葛川・久多のゆるキャラやパンフレットができました。また、今年から「ＫＣＬプロジェクト」も始まりました。「ＫＣＬ」は、Ｋｎｏｗ、Ｃｏｍｅ、Ｌｉｖｅの頭文字をとったものです。葛川・久多を知ってもらい、来てもらい、住んでもらおうというプロジェクトで、中学生が企画します。昨年の６月には、中学２年生が葛川・久多の紹介ビデオを作成し大阪の中学校と交流してきました。・・・・・・私は、葛川・久多の自然やいいところをいつまでも残していきたいと思っています。そのために、案を出し合って私たち中学生でできることをやっていきたいと思います。

●卒業生　Ｃさん（札幌市立福移中学校卒）

学校行事などを考えると人数が少ない分、役割分担は確実に多くまわってきます。運動会や学校祭など、行事自体は多くの学校と同じで特別な活動があったという印象はないのですが、行事のたびに必ず生徒（ママ）全員に複数の役割があり、誰かが役割を果たさなければ上手くいかない、というのが当たり前でした。おのずと責任感、好きなことばかりやっていてはいけないということを学んだと思います。

役割のひとつとして今も印象に残っているものがあります。現在は無いとのことですが、学校で飼育していたポニーやヤギの世話です。児童生徒たちにできる世話は限られていましたが、ペットではない大型動物の世話はどの学年でも責任を持つことを直接感じる役割でした。遅刻や忘れ物の多い生徒もこの当番の日は早いバスで登校し、世話をしていました。これは市内でも福移の大きな特徴でした。・・・・・・

現在、少人数の通信制高校で教員として勤務しております。通信制高校を選択する生徒たちの事情は様々で、心の問題や人間関係で躓いてという生徒もたくさんいます。その中で日々感じるのは生徒たちの経験の無さです。友達とぶつかると解決を探るのではなく逃げる道を選ぶ、役割分担を避ける・・・。成功体験の少なさだけでなく、様々な積み重ねの結果どうしても自己肯定感が乏しく、なにもやらずに過ごそうとしているように思える生徒が増えています。本校の方針では、とにかく生徒に近づいて生活を共にすることに時間を割いています。福移小学校に転入した当初、先生との時間が多いと感じたことと同じことを今、行っていると思います。少人数の強みはそこではないかと感じます。時間的にも余裕があるとは言えず、できないことも多々ありますが、会話を通じて自信を持って、少しずつ同年代と付き合い、責任を持って行動することで生徒たちは少しずつ成長していっていると感じます。

毎日が悩むことの連続で、自分のやっていることに自信をもてないことも多々あります。けれど、小規模の福移小中学校で考えたこと感じたことは、現在の私の職業選択に影響を与えたと思います。

●卒業生　Ｄさん（札幌市立福移中学校卒）

福移中学校を卒業したのは、今までの人生でいうと丁度折り返しの辺りですが、環境、友人共に、今でも鮮明に思い出されます。私が福移中学校に入学した経緯は、自分の意向というよりは、完全に親の勧めでした。混沌とした小学時代から、どうにか環境を変えたいと願っていた私の希望を、母が酌み取った格好です。地元の小学校はいじめが多発しており、私はいじめる側にもいじめられる側にも付かないタイプで、親しい友も作れず、とにかく中学校は環境を変えたいと、地元から離れた教育大附属中学校に中学受験をしました。しかし見事玉砕し、目標を見失っていました。そんな折、母が偶然ニュースで福移の事を知り、即申し込んでくれたのがきっかけです。・・・・・・地元の中学に思い入れも無いし、別にどこでもイイやという中途半端な気持ちで入学式を迎えました。

入学式でまず初めに感じたのは「改めて小さい学校…しかも人が少ない。」と言う事。人数が少ない事にかなり不安もありました。今までは大人数の中、私に協調性があっても無くても何となく成り立っていたので、福移ではそれが通じそうにないなと感じた為です。しかし、よく解らないけれどワクワクする、という不思議な感覚も覚えました。20 人という少ない同級生の中で、自分がどういった立ち位置に居て、何を担うべきか。少ない人数だからこそ真摯に考えた事を覚えています。今考えると、ここが一番悩んだ部分かも知れません。

クラス替えの無い 3 年間を、楽しくするも、つまらなくするも自分次第という状況。中学生という多感な時期だからこそ、福移の少人数の中では、嫌でも全員と関わらなければいけないし、一緒に涙し、怒り、喧嘩をして、最後には笑い、達成感を感じて、全員で切磋琢磨出来ました。・・・・・・

●柏原市立堅上中学校による卒業生対象調査（2017 年夏季休業中に実施。10 月 4 日付で小・中保護者に発表）

◆問い…「関わる人数が少ないため、コミュニケーション力が育たないのではないか」

★全校生徒の人数は少ないが、他の学校でも人数が多い分関わる人数が多いとは限らない。その点堅上では少ない分一人ひとりと深くかかわることが出来、クラスの個性を知ったうえでコミュニケーションをとっていたので、コミュニケーション力は十分に育ったと感じています。（柏原市立堅上中学校、2009 年度卒・特認）

★関わる人数は少ないけれども、少ないからこそコミュニケーション力が育つ。ケンカをしても人数が少ないから関係を修復せざるを得ない。でも、社会に出た時に役に立つのは実はこのようなコミュニケーション力ではないかと思う。（堅上中学、2013 年度卒・特認）

★実際は、大人数でいるよりコミュニケーション能力は上がります。それは少人数だと必ず話さなければならないからです。大人数の中の 5 人ほどと話すより、少人数 10 数人全員と話す方が成長すると思います。（堅上中学、2013 年度卒・特認）

◆自由記述

★堅上に通ったことで、積極的になれたと思います。委員会や部活動、授業など学校生活を通じて身に付きました。また、それは社会人になってからもとても活かされていると思います。「少人数だから人とのかかわりが少ない・・・」と心配される方が多いと思いますが、その逆で、少ないからこそ心を開いて話せる友が多く、また、地元の子と仲良くなると縦のつながりが出来、先輩後輩とも仲良く出来たと思います。このつながりが大切なのではないかと思いました。（2009 年度卒・特認）

★少人数の学校であっても、たくさんの事柄の中心となって物事を進めたり話したりする経験ができました。多くの人数の中でもその経験を生かして、現在（卒業後）もクラス等のリーダーとして発言したり、まとめ役をしています。一人一人のかかわりが深いので、考え方の違う人ともたくさん話し合うことが出来るので、他の人を理解し、尊重することが出来、コミュニケーション力が育ったと思います。そのおかげで、高校でもその他の場でもたくさん友人ができています。（2016 年度卒・校区）

●保護者　Ｅさん（神戸市立藍那小学校卒業生の母親）

・・・・・・少人数で自然の環境豊かな学校が向いているのではないかと思い、たまたま、神戸新聞で募集要項を知りまして検討いたしました。・・・・・・。

藍那小学校の良い点は、まずは、自然豊かな校舎での少人数の構成。１年生から６年生、さらに先生方までがひとつになって１日を過ごすことでした。全校生が１年から６年で 21 人という学校生活は、思いのほか娘を成長させました。それは、親として想像以上でした。4 クラス 35 人学級の時は、だんだんと積極性も薄れ、行事でもやりたい子がするから私はいいの、的な様子でした。・・・・・・忘れ物や集団行動のテンポのズレなどからストレスが出ていました。・・・・・・藍那小学校では、高学年として下級生を指導したり、まとめたりとリーダーにならされました。だんだんと発表もこなし、自分なりの意見を考えて表現する方法も見つけていきました。また、授業ではわからない所を恥ずかしがることなく先生に聞ける環境でした。むしろ、わからないことを質問することが先生とのコミュニケーションのように活発に手を挙げていました。それはだまって授業を受け身に受けていた時とは別人の用でした。どの児童も藍那小学校では、そういう感じでした。ひとりひとりに合わせた授業。それは、とても贅沢な時間に思われました。

・・・・・・娘は・・・・・・藍那小学校の２年間で、先生を信頼して自分をさらけだして頑張りました。出来ない事には、何度でも付き合っていただきました。そして、励ましの言葉、お褒めの言葉をたくさん頂いたようです。もちろん、だいぶ叱られもしたようです。・・・・・・

とても楽しく充実した２年間を過ごして、ふたたび地元の中学校へ入学する時、とても緊張してました。しかしながら、この２年で植え付いた自己肯定感は、確かなもので何とか自分の足で進んでおります。母親の私も実は、とても娘を信頼することが深くなった２年間でもありました。こんなにもがんばれたんだ！こんなにもできるんだ！と、その伸びしろを気づかせてくださったのが藍那小学校でした。卒業のスピーチは、3 人でしっかりと長セリフをこなし、堂々としてひとりひとりが輝いておりました。

そして、何よりは給食が美味しかったこと。これは、娘の転校のひとつの動機になったことでした。学校の田んぼや畑で在校生が育てたものが給食になります。教員の方、全校生で一緒に給食を食べて、娘は小さい子の世話はとても得意になりました。生きる力を育ててもらいました。失われつつある村社会のような学校でした。

中学生になっても娘は携帯もないしラインもしないし、メール友達もいません。テレビも見ないのですが、家族とおしゃべりしてのんびり 12 歳を過ごしています。友達は多くはないようですが、自分をしっかり持った子になりつつあります。まだまだ、成長過程ではありますが、5 年、6 年と過ごした時間が大きく影響していることは確かです。この中学生時代をどのように過ごしていくのか？楽しみでもあります。

●保護者　Ｆさん（神戸市立藍那小学校６年生の母親）

藍那小学校で学んで良かったこと（子供の成長）

【1、取り戻したやる気・・積極性】

前の学校での息子の位置は“その他大勢”（言い方は悪いのですが）。学校行事や大会などの場で、本人がやりたいと希望したとしても、注目を浴びるような個人の役をさせて貰える事はありませんでした。・・・・・・息子は「僕もやりたかったのに！いつも〇〇君ばかり、ずるいわ」と、よく文句を言っていました。成績の良い子、運動神経がある子、頭の回転の早い子、自己アピールの上手な子、いわゆる出来る子の中では息子が選ばれることはまずありません。その内、行事に対して気持ちなくやっていました。（以前の学校が悪いのではなく、生徒数が多いとそうなります。）

でも藍那小学校では、代表の挨拶はみんなが交代でします。学芸会では、一人ひとりが楽器を担当させて貰います。させて貰える分、間違ったら大変。誰が間違ったかばれる（？）ので、目立つことの恥ずかしさや、みんなに迷惑をかけてしまうプレッシャーは、半端ではありません。学校の授業でも、個別にしっかりと教えて貰っ

ているのですが、家に帰ってからも　必死に練習をするようになりました。「お母さん、間違えないように頑張るわ。」と以前の気楽さからは考えられません。息子が努力している姿は　嬉しく、微笑ましい。・・・・・・

藍那小学校の子供たちを見ていて思ったのですが、ここでは自分を表現できる場、頑張る機会をみんなが平等に与えて貰えます。少人数だからこそ出来る、素晴らしいことです。この学校では、出来る子も出来ない子も、みんな同じで、みんなが主役なのです。

【2、芽生えた責任感・・主体性】

前の学校での出来事です。掃除の時間、息子は　裏庭掃除の担当でした。たくさんいる生徒の中で、真面目に掃いている女の子、ほうきで遊んでいる男の子、息子はというとしゃがんで土をいじっていました。チャイムが鳴ったと同時に立ち上がって「終わったわ。」と教室に戻って行きました。何もしなくても、時間だけつぶした掃除タイムでした。この様子を見て私は（こういうことは、掃除だけじゃなくて、授業中や色々な場面でも同じような光景なのだろうな・・）と、息子の日々の学校生活が分かったような気がしました。

でも今はというと掃除では教室や廊下、場所に対して１人が担当。後、小鳥当番や畑の水やり、給食当番に委員会活動と一人の責任は重大。真面目なお友達に任せていた、前の学校のようにはいきません。自分がしなければ終わらないのです。もう手の抜きよう、さぼりようがありません。・・・・・・先生方も生徒に目が行き届くので、一生懸命な姿に気付いて下さり認めてくれます。「今日、“頑張ったね”って先生が褒めてくれたの。」と任せられた責任感に嬉しさも加わったようです。無気力な考え方から抜けだす事が出来て本当に良かったです。

【3、友達、下級生に対しての思いやり・・協調性】

前の学校では、休み時間はクラス単位（その中でも仲の良い友達）で遊んでいました。学芸会も二部制なので（奇数クラス、偶数クラスを時間で分ける）、同じ学年であっても　同じクラスにならないと名前と顔が分からないままでした。同級生ですらこのような状態だから、異学年で遊ぶことなど　ほとんどありませんでした。

しかし藍那小学校では、休み時間は　全生徒（といっても、23 人ですが）で遊びます。給食も全生徒と先生で食べます。前の学校なら、話をすることも出来ない校長先生や教頭先生も一緒に食べます。みんなが、あだ名で呼び合い、学年の枠を超えて仲が良いです。上級生は、しぜんと下級生のお世話をします。例えば、運動会の前、競技にある一輪車が乗れない下級生がいた時には、自分の遊びを返上して乗れるようになるまで教えてあげます。そして乗ることが出来た時には、自分のことのように一緒に喜んでいます。そのように優しく接して貰ったことで、その下級生は次に自分より下の子たちのお世話をします。それはまるで思いやりの連鎖で、教えてあげられる立場になったことを喜んでさえいます。息子は一人っ子なので、年下から感謝や慕われる喜びを味わう事が出来て幸せな限りです。

【4、豊富な体験と人（地域）とのつながり】

・充実した体験学習（例、農業体験活動）・・・学校専用の田んぼがあります。自校炊飯をしていて、もみ蒔きから始まり、田起こし、田植え、稲刈り、脱穀まで自分たちでします。学習畑では、苺や芋、胡瓜にとうもろこし等々の野菜を植えて水やり、草ぬき、収穫（苺狩り、芋ほり）をし、調理実習や給食、放課後に食べます。嫌いな野菜も、食べるようになりました。

・学校行事は、地域行事でもある・・・運動会や学芸会は、生徒が披露する場ではなくて、親や地域（老人会）も参加します。付き添い程度ではなく、プログラムにも項目として入っています。子供たちは喜んで応援し、大人たちも自分の子供（孫）だけではなく　子供みんなを応援して成長を見守ります。入学式や卒業式も、全保護者と地域の方が出席してお祝いします。

・伝統行事を学ぶ・・・盆踊り、餅つき大会、左義長を地域の方と保護者も一緒にします。毎年、子供たちも楽しみにしています。　学校田のわらを使って、正月用の注連縄やわら草履を地域（老人会）の指導で作ります。昔あそび（お手玉、あやとり、こま回し）も教えて貰います。

●保護者　Ｇさん（母。子ども２人が和泉市立南横山小学校卒。特認）

我が家の子達は南横山小学校が特認制度を始めたその第１期生として利用し､5 年生と３年生に編入しました。前の学校はごく普通の地域の小学校で特段嫌なこともなかったのですが、楽しいこともなく、どこか不足感を感じていました。そんなときに特認制度でこの学校を知り興味を持ち、来てみるととてもいい所で子供達もすぐに気に入って転校することを決めました。

学校に行き始めてからは本当に毎日が楽しそうでした。子犬がじゃれ合うようにふれあい、転げまわり、遊びました。地域の小学校の子達の遊びといえばゲームをすることで、こうしたいわゆる子供らしい遊びをすることが少なく、そういう閉塞感もあったので、子供達はのびのびとこの学校に溶け込んでいきました。1 期生ということで心配でしたが、地域の方たちの愛情のこもったかかわり合いを含め素晴らしい時を過ごすような、そんな教育を受けることができて本当に良かったと思っています。

学校の先生だけにとどまらず、地域の方にたくさんかわいがってもらい、また、叱っていただき、生きた教育を受けたと実感しています。子どもたちの教育の原風景として、そうした分け隔てなくちゃんと関わるということが刻み込まれ、もはやそうであるのが当然と感じて大きくなっています。子供と話していても言葉の端々にそう思うことがあるからです。・・・・・・

●保護者　Ｈさん（母。息子さんが和泉市立南横山小学校卒、娘さん５年生）

息子が４年生、娘が２年生にあがるタイミングで、転校してきました。

以前から、自然館クラブという NPO の自然観察会で南横山小学校の学校林を散策したり、全く知らない場所では無かったので、子どもたちも豊かな自然に惹かれ、転校したいと望みました。一クラスの定員が 20 名までという、小規模教育も大変魅力を感じました。

以前通っていた学校は一クラス 43 人ほど。毎年クラス替えもあります。息子は、環境の変化に、人一倍ストレスを感じており、やっと親子ともに理解され馴染んだと思えば、新しいクラスというのも親子ともども、人間関係の構築が難しく感じました。

実際に通ってみると、南横山小学校で得たものは、見学や説明会での印象や自分達の想像をはるかに超えるものでした。大げさではなく、ここでの学校生活は長い人生においても特別な経験・仲間を得た、まさに宝物のような時間でした。

地元の方の協力も得ながら、特色ある教育活動がなされていることも素晴らしいのですが、何よりもすごいのは、子どもたちと子どもを取り巻く大人たち。人の力です。

一人一人の名前も顔も覚えて、転校したての子や元気のない子にはちゃんと気づいて声をかけてくれる、地元のおじいちゃん。毎朝、見守ってくれる駐在さん。登下校の長い道のりを人知れず掃き清めてくれる地元の方。学校林整備には、自らの道具を持ち込み大工仕事や草刈りなどの仕事を担ってくれるお父さん。

通常のカリキュラムの他にも色んな行事があり、大変だろうにも関わらず、いやな顔をせず熱心に動いてくださる先生方。ほかにも数えればきりがない沢山の方々が、子どもたちを見守り育ててくれました。

子どもたち自身もまた、大勢の中でまぎれるのではなく、自分が学校の一員としての自覚を持ち、どの子もしっかりとそれぞれの役割をこなします。その一生懸命な姿勢に、また周りの大人たちも応えようと頑張る。お互いに相乗効果でとても良い学校になるのだと思います。

縦割りの活動も、とても素晴らしいです。小さなころは、大好きなお兄ちゃんお姉ちゃんを追いかけるばかりだったのが、少しずつ学年があがるごとに今度は自分も、その先輩に近づいていく。6 年の最高学年になった一年間の子どもたちの成長は、目を見張るものがあります。

その集大成ともいえる卒業式。南横の卒業式は、涙なしでは過ごせません。先生から卒業証書を受け取った子どもが、両親の方へ歩き、目の前で堂々と自分の夢を宣言します。

在校生との贈る言葉のやり取り。次に６年生になる、見送る側の５年生。大好きな先輩の卒業に、涙を流す子どもも一人ではありません。泣きながらも、自分の担当の場面では、しっかりと大きな声で言葉を伝えます。前日に、「泣いてしまっても、大好きな６年生のために立派な晴れ舞台を作りたいから絶対に頑張る」と話していたと親御さんから聞きました。そんな風に学年を超えて思いあう事ができるのも、縦割り活動や小規模で学年をまたいで遊ぶ機会の多い環境だからではないか、と思います。

それぞれの子どもにドラマがあり、スポットが当たる瞬間があり。エピソードも沢山ありますが、卒業に際してどの親御さんも共通して言われるのが、「関わってくださった方々への感謝の気持ち」と、「親も成長させてもらったということ」と、「ここでの経験が子どもたちの土台となりこれから先、もし辛いことがあったとしてもきっと乗り越えていけるという思い」です。

少人数でクラス替えもない分、本気で人と向き合い関係を築いていく。保護者も子ども同士も、ある意味逃げられない分、丁寧に関係を作り上げていくのだと思います。先生方も、自分が担当した学年だけでなく、6 年間での育ちを、全員でバトンを繋ぎながら、一貫した姿勢で子ども自身の力を信じて見守ってくださいます。

そうやって培われた人間関係や、そこに至るまでのさまざまな経験が何より代えがたい学びであり宝物だなあと思います。皆で何かを成し遂げる、経験を積むことのできる体験学習が多いことも、関係を構築していくうえでプラスになっていると思います。

南横小に通うことで、ありのままを受け止めてくれる仲間に出会い、一生懸命に取り組む先生や周りの大人、先輩の姿勢を見て学び、息子の土台もしっかりと出来たと思います。適当に大勢にまぎれて誤魔化さない、何事にも一生懸命、自分らしく、あきらめない心がもてたと思っています。

●保護者　Ｉさん（母。3 人の子どもが全員宇治市立笠取小学校卒）

笠取小学校「ＰＴＡ会報誌」2018 年 3 月

・・・・・・12 年前の春、長男が入学させてもらい、その 2 年後に次男が入学し、長男と入れ違いに、三男が入学させていただきました。そして、この春、いよいよ三男も卒業を迎え、12 年、お世話になった笠取小学校に通う年月に幕を閉じようとしています。

子供達にとって、笠取小学校は、大好きな場所でした。子供達の学びのフィールドは、学校周辺には納まらず、笠取の隅々まで広がり日々、発見や驚きの連続でした。ノビル、わらび、つくし、蕗のとう、あけび、さまざまなコケ、若竹、小魚、サワガニ、コオイムシ、ニイニイゼミ、かめ虫、霜柱、水晶、さまざまな鳥の声など。自然の美しさ、不思議、神秘を肌で感じ、耳で聴き、目で見つめ、臭いをかぎ、まさに五感をふるに使って過ごした日々だったように思います。子供達が、一日一日とても豊かな日々を重ねてこれたのは、それを側で一緒になって感動し支えてくださる先生方はもちろん、地域の方々の支えがあってのことに他なりません。笠取小と聞いて、頭に浮かべた時に、笠取の風景全体が頭に描かれるのは、まさに、子ども達にとっても、私達親にとっても、笠取の地域全てが学校だったんだと思います。私自身、地域の方々から教えていただいたことは、数知れず、人との向き合い方だったり、生きていく上での姿勢や自分の在り方を考えていく上でなくてはならないかけがえのない出会いであり、時間だったと感じています。本当に心から感謝しています。これから、子供達も、この春新たなスタートを切ろうとしています。笠取での学びが、彼らのペースとなり、人生を支えてくれるものと信じています。・・・・・・

●保護者　Ｊさん（母。2 人の子どもが和泉市立南横山小学校卒）

「子どもの育ちにとってこんなに素晴らしい学校はなかなかない」。それが 6 年間、子どもたち二人が通い、保護者として南横山小学校に関わってきた感想です。

緑豊かな山間に佇み、大阪で唯一の学校林を校舎裏に持つ抜群の自然環境の南横小では、小鳥がさえずり、国蝶オオムラサキが舞い込むなど、五感をくすぐる体験がたくさん。それらは、決して私たち人間に作り出せるも

のではなく、何物にも代えがたい自然からの贈り物であり、子どもたちの心の原風景になりうるものです。

また、1クラスが20人以下という少人数制は、先生と子どもたちの距離が近く、一人ひとりの存在感が大きくなります。授業も友達の顔が見えるコの字型ですするなど、対面方式で意見交換もしやすいため、より濃い時間になります。先生方は子どもたち一人一人の個性を把握しながら、授業も生活指導も丁寧に対応して下さっていました。

少人数制というのは子どもたちにとっても、先生にとっても幸せなあり方だと思います。

世間一般に心配されるのは、少人数では集団生活（団体行動）が学べないのでは？とか、社会に出たら大勢の人に出会うのに人間関係は大丈夫なのか？ということ。でもそれは、人数に関係するものではなく、そこにいる仲間たちと対話したりぶつかったりしながら、「人は信頼できる」という思考に至れるかどうかなのだと感じます。例え大人数の学校だとしてもそれが出来ない子たちもいます。それどころか少人数の学校の方が先生の目が行きとどきやすいので、問題解決への対応が細やかになります。もっと言ってしまえば、そもそも「人間関係をうまく出来るかどうか」は家庭のあり方の方が大事になってくることでもあります。

友達の人数ということころでは、学年を越えてみんなが友達という「縦割り学級」が日常的にあり、授業の中だけの縦割りの交流ではなく、休み時間もいつもみんな友達です。その中で、低学年の子たちは高学年の子たちにあこがれ、自分たちもいつかあんな風になりたいと目標を見つけます。また、高学年の子たちは低学年の子たちとの関わりを学びます。

5、6年生になると、たくさんの行事のリーダとして誰もが活躍せざるを得ない環境に置かれます。少人数なのでみんなで協力しないと成り立たない為なのですが、それが返っておとなしい子どもたちをも前に出る役割を持たざるをえない状況となり、一歩を踏み出すことになるのです。

南横小は子どもたちに託す行事が多いのですが、一例をあげると、運動会の応援合戦では先生方は全く口を出さないスタンスをあえて取ります。曲も振り付けもセリフも、低学年の子たちに教える事も・・・・・・6年生が企画運営もする実行者でもあり責任者です。その徹底ぶりに赴任してきたばかりの先生は驚くそうです。遅々として進まない状況に口をはさみそうになりつつ、ぐっと我慢するのだとか。そして、運動会が終わった時の6年生の成長ぶりには毎年、目を見張るものがあるといいます。

人間関係を学ぶと言えば、地域とのつながりがあります。毎年3学期の始業式前日には野外クラブの子どもたちと地域のおじいさん（Ｓさん）とで七草を摘みに行き、始業式には全校児童で七草粥を食べます。「通知表を忘れてもお椀は忘れないように」という冗談が飛び出るほど、年始の心温まるお楽しみの体験になっています。また、Ｓさんは、年間通して南横ファームのお世話をして下さっていて、大根や蕪、玉ねぎなどの植え付けから収穫まで、子どもたちに教えてくださいます。

夏に行われる納涼大会は地域挙げての夏祭りで、在校生はもちろんお年寄りも卒業生も1年に1度のお祭りを楽しみます。運動会では1年生と老人会の方々による玉入れ合戦、卒業式が近付いてくる頃には、定さんの手助けを借りて、低学年による6年生へのお祝いとして餅つきがあります。南横小は既にコミュニティスクールを地で行っていると言ったところです。・・・・・・

さらには、南横小ならではの自然や歴史、文化や人が、多角的につながった深い学び合いも、子どもたちに磨きをかけていることを知りました。多くの南横小ならではの行事の中で、特に印象に残った炭焼き体験ひとつをとっても、学ぶことは実に多様でした。職業体験の一環として子どもたちが会社を立ち上げ、販売方法や広報宣伝、お金の使い道まで話しあいながら試行錯誤していました。原木伐採の時には、切り倒した木々が倒れゆく音と、大地のざわめきを肌で感じながら、大人も子どもも協力し合って、たくさんの原木を運びました。二ヶ月間乾かした原木を縛って窯に入れ、一昼夜かけて焼きあげた炭を、子どもたちは真っ黒になりながら、指先ほどの小さなかけらさえ、大切そうに拾い集めていました。みんなで協力し合って時間をかけて、自分たちの手で作り

だした炭だからこそ、小さなひとつぶまでもが子どもたちの心とつながり、輝きだすのだなと実感した瞬間でした。炭を作りだした時間、つまり、南横小で過ごした時間そのものが、大切な宝物です。・・・・・・

子どもたちにとって南横小で過ごした心豊かな子ども時代は、一生の宝物だと感じています。

●保護者　Ｋさん（母。娘さんが福岡市立勝馬小学校卒）

勝馬校区の美しい海と緑豊かな環境を活かし、地域の皆さんまで巻き込んだ授業と同級生のみならず上級生や下級生と密に関わる毎日により、娘は核家族の我が家では決して経験できないことをたくさんさせていただきました。また、複式学級のおかげで、自分の学年の勉強だけでなく、上級生の授業では予習を、下級生と一緒の時は復習を自然な形でさせてもらったことが学習面で成長できた一因だと思います。現在、勝馬小の１年生に息子が通っておりますが、彼も当然のように勝馬小進学を希望し、毎日楽しく通学しているところです。1 クラスの人数を増やす案があるなどと最近ニュースにもなりましたが、そんな意見の方にこそ見ていただきたいです。・・・・・・

●保護者　Ｌさん（母。息子さんが甲賀市立多羅尾小学校卒。娘さんは２年生）

多羅尾小学校で息子は４年間を過ごした。そして今、娘が２年生になり２年目を過ごしている。多羅尾小学校は自宅から車で約 40 分ほど、そして距離にしては 25km になるが、毎日の送り迎えの労力を遥かにしのぐものがあったと思っている。

息子が多羅尾小学校に通うようになったのは 2010 年。彼が小学校３年生の４月からである。それまでは地元の小学校にいた。そこは数年前につくられた大型団地の影響で徐々に人数が増え、2～3 クラス程度だった学校が、急激に人数を増やし始めていた時期で、彼の学年は 36 人の３クラスでのスタートだった。１年生の２学期も後半から登校をしぶり始めた。ちょうど私の母を亡くし家事と仕事に追われるようになったこともあり、教育相談にかかることにした。２年生では朝から「頭が痛い」「おなかが痛い」「胸のあたりがもやもやする」などと言い、ほぼ毎日送って行くようになった。また、しんどいと言って休む日も週に 1～2 回と増えてきた。年間の欠席は 30 日にもなった。風邪などの症状が本当にある時もたまにはあったが、だいたい朝をゆっくり過ごし昼ごろには元気になっていた。休みが度重なることで、算数でのつまずきが気になり始め、休みも週に３日４日になることもあった。3 学期も３月に入った頃、友人で近所に住む多羅尾小学校の養護の先生が、全校みんな学校が好きっていうところやで」と何回か声をかけてくれたこともあり、一度行ってみることにした。息子のほうも快諾だった。見に行くのなら朝の会からということで、朝の会から帰りの会まで親子で参加した。息子の学年は男の子１人のクラスだった。ちょうど図工で段ボールを使って街をつくるという大きな制作をしていたのをさせてもらい、夢中で制作して楽しい一日を過ごした。「ここやったら行ける」と本人も言うので３日ほど通った。ストレスなく過ごしているようで表情もよく、その後、何度か多羅尾小学校の校長先生や養護の先生、教育相談の先生とも話し合い、思い切って３年生の４月から転校することにした。

多羅尾小学校に行き出してからは、「頭が痛い」などと言うこともなくなった。「胸がもやもやする」というのはどういうことなのか、後でわかったのだが、言いたいことを言えなかったり、わからないことが納得できなかったりすることが、たまりにたまって起こる現象のようであった。大勢の中ではなかなか消化できずにいたようだ。小規模ならではで、見通しがもちやすかったのだと思う。・・・・・・

多羅尾小学校では男２人のクラスで、それぞれ持ち味は違うのだが、とても楽しく過ごしていたように思う。互いの家を行き来して遊ぶこともあった。オペレッタや遠足、授業では音楽や体育、親子活動や運動会、地域の行事など全校児童での活動も多く、面倒見の良い上級生にもよく声をかけてもらうことも多かった。また、２つ下の子と仲良くなり、話し始めると時間を忘れるくらい楽しく過ごしていた。

通学では、車での送りが多かったが、帰りはバスと電車を乗り継いで帰ってきていた。最初はバスに乗り遅れてバス停で泣いていたこともあったが、地域の人に声をかけてもらったりしながらなんとか自分で考えて行動で

きるようになるなど成長も見られるようになった。欠席日数はそこそこあったが、どこまでわかっていてどこは分かっていないというのを先生のほうで把握してくださっているので、つまずきも徐々に改善されていったように思う。ほぼマンツーマンの指導だったからこそ、いいところも悪いところも受け止めてもらえて頑張れたと思う。小学校ではきちんと学習内容を学べることは大事だと思う。だからこそ毎年ここができるようになったと成長したところが如実にわかり、頼もしく思えた。

6 年生になると 1 年生に妹が入ってきた。多羅尾小学校での全校の取り組みであるオペレッタをとても楽しみにしていた。オペレッタは20数年になる多羅尾小学校での取り組みである。5年生の時の役はとてもはまり役で本人もとても楽しんでいた。毎年、多羅尾小学校での発表と町内のホールでの発表があり、そんな兄の活躍も見ていたようで「自分も多羅尾に行きたい」「多羅尾でオペレッタがしたい」と自ら望んで多羅尾に行くことを決めた。妹の手前ということもあるのだろう 6 年生を一日も休まず行くことができた。3 学期には「皆出席にする」と言い、しんどいけれど学校に行くという日もあった。

全校 10 人の学校の最高学年は児童会、委員会や色別、また行事での役割、オペレッタなどすべてのことの中心にならなくてはならない…というのは小規模校のしんどいところだが、すべてのことにかかわりを持つため責任感や根気も養われ、運営のしくみなどもわかり、自分たちもしてもらってきたことがよくわかった１年だったと思う。とくに先生方や地域の方、下級生のみんなに励まされ応援されて過ごしたこの１年は大きな自信になったようだ。

多羅尾小学校での息子の４年間は本当にいろんなことがあり充実した日々であった。

８．親（地域住民）の成長の姿

●保護者　Ｍさん（母。子どもが札幌市立盤渓小学校卒）

6 年間、クラス替えがなく、親も子も６年を共に過ごし「成長しあう」「育ちあう」という感じでした。これはどのようなメンバーが集まるかによって大きな差があり、学年ごとにそれぞれ違うと思います。どのような価値観を持った人が集まるか、運もあると思います。私たちの学年はとても恵まれていました。

6 年のあいだには、様々な問題も起こりました。友だち間のトラブル、家庭の問題から子どもが良くない方向に向かっているなど、その都度、関わりのある親たちが個人的に話し合い、子どもや親にも言いにくいことも伝えあい、クラスの皆がいい育ちをするための取り組みをしました。いいことも悪いことも共に歩んできただけに、卒業後の現在も、それぞれの成長を互いに喜ぶ関係です。・・・・・・

●保護者　Ｎさん（父。子どもが神戸市立藍那小学校卒）

以前の学校では、私自身ＰＴＡに興味が無く（興味が無いというより、出来るだけ関わりたくない気持ちが強い）妻が１年生の時に役員をしていた時も、何をやっているのか全く分からない状態（本部や専門部会などの組織や運営などについて）でした。・・・・・・この２年半、子供を小規模特認に通わせてみて学校とＰＴＡについて感じた事は、少人数の為に全学年の子供や保護者・教職員の顔が分かっているので、コミュニケーションを取ることができ身近な存在に感じます。また小規模特認校を選択して通わせているので、保護者の方も学校に関心を持たれている方が多いと感じます。

以前の学校では、規模が大きく同学年どころか同じクラスでも全員の顔を覚えることが出来ない状況でした。また先生についても、担任以外はほとんどわからない状況で先生に対して親近感は湧きませんでした。これだけ人数が多いと誰かがＰＴＡの仕事をやってくれるのでは？という気持ちも起きますし、色々な考えを持つ方達と意見を擦り合せるのは大変だという事もあり、学校やＰＴＡに関心を持つことはありませんでした。

小規模特認校に通わせたことで、父親として教職員やＰＴＡ役員や保護者の方々、そして地域の方たちと出会い、自分の知らない世界を経験・そして教えられました。自分の中で物事に対する考え方がこれまでの経験を元

にしたものとは変わり、考え方や評価などに多様性を持てる様な気がします。

学校は子供に勉強を教える場所だけではなく、教職員・保護者・地域の方々が一緒になって子供たちを育てていく所で、また親も子供と一緒に成長する所だという感じがします。

ＰＴＡのイメージは、大変・忙しい・しんどい・保護者間でトラブルがあるなどの負の面が目立ちますし、私もそういう目で見ていました。今回育友会運営に関わる事でしんどい所がたくさんありましたが、得る物もたくさんありましたし、この経験を自分の仕事や生活に生かせればとプラスに考えています。

●保護者　Ｇさん（母。子ども２人が和泉市立南横山小卒・特認）

ＰＴＡ活動も人数比率から考えるといやおうなしに当たります。もちろん地元の人たちはもっといろんな役（子ども会、消防、青年団など？）がありましょうから、私たちが嫌だとか言ってられないと思ってお引き受けしました。しかし、すべては徒労に終わりました。

ＰＴＡは、集まること自体とても楽しく、活動が煩わしいと思ったことは一度もありません。地元の人たちの中に入ってあれこれさせてもらうことはより仲良くなれることでより地元の事を知れることでとても楽しいものでした。学校の先生とお話しする機会もたくさんあり、フランクに話してくれる先生にわが子の様子や学校の様子を聞いたりすることはもちろん、どんな風に関わろうとしてくれているのかという先生方の思いをお聞きする機会がたくさんあることもとても魅力でした。自分の子どもから聞く学校や地域の話と、直接自分で感じる学校や地域の人の思い。それを重ね合わせることによって、たくさんのことを知ることが出来ますし、感謝の気持ちも増しました。・・・・・・でも、そうして楽しんでいるという面もありますが、実際に活動してみると、子どもたちの活動にたくさんの大人が関わってくれているということがわかります。その関わる側になることがＰＴＡ活動をするということですが、そうして関わることが面倒と思わずにしてみることで、子供が楽しんでくれたら嬉しいとか、次は何をやって楽しませようかな、みたいな気持ちも生まれてくるので、子供も大人もみんな楽しいというような活動に感じていました。

できたら当たりたくないというＰＴＡもここですると楽しくハマってしまうこともあると思います。実際に私はここでして以来「PTA＝楽しいこと」のような気がして、中学も高校もさせていただいて楽しく過ごしています。

●保護者　Ｏさん（母。宇都宮市立清原北小 140 周年記念誌「「小規模特認校」が教えてくれたもの」）2013 年

まずは、創立 140 周年おめでとうございます。母・私・息子と三代にわたり学んだ母校が 140 周年を迎えられたことを、この８年間を思うと感慨深いものがあります。

平成 15 年 11 月 27 日、息子が入学した７か月後に「清原北小、複式を解消できなければ５年を目途に統廃合」と新聞記事が載り、「6 年生で転校はないでしょう」と落ち込んだものでした。この時の気持ちは、「大きな小学校へ行ったら馴染めないのではないか」とか、「スクールバスは走るのか」など廃校を前提の全くの後ろ向きでした。翌年に執行部にお世話になり、平成 17 年度からの「小規模特認校」に向けての取組みで、学校は「特色ある学校づくり」を、地域は「地域振興」を、保護者は「学童保育ＫＡＳＡ」の開所に向けて尽力しました。執行部の役員がＫＡＳＡの役員も兼ねたため、連日深夜まで打合せをしたものです。執行部役員として清原工業団地内の会社にポスターとチラシを持って北小のＰＲにも行きましたし、イベントがあればチラシの配布もしました。それと同時に、カーサ開所のため諸規程の作成・活動場所の備品調達・予算の見積り・カーサ講座の計画など、やらなくてはならないことが盛りだくさんでした。ここまできたら「努力してだめだったら仕方ないが、何もしないで後悔はしたくない」という気持ちで、前向きに取組んでいました。「人を見たら泥棒と思え」という言葉がありますが、「子供を見たら北小へ」です。そのための努力は惜しみませんでした。だから、17 年度の入学式で新入生が２列に並んだときは感無量でした。

私は、「小規模特認校」の指定をいただいてよかったと思っています。特色ある学校づくりのために、子どもたちはいろいろな経験ができたし、親も努力をすることで成長することができたと思います。一人ではできないこ

とも、みんなでやればできることが分かったし、「がんばって」と声をかけられることがこんなにうれしいことだと気づかせてもくれました。最後になりますが、ご尽力くださった先生方・地域の皆様に感謝申し上げます。

●保護者　Ｊさん（母。子ども２人が和泉市立南横山小学校卒）

・・・・・・また、地域の方々との関わりは、毎朝の校門前での見守りや納涼大会、運動会、炭焼きばかりではありませんでした。私たちの見えないところで、通学路の落ち葉を掃き清めて下さった方もいれば、南横ファームのお世話をして下さった方、道路整備をして下さった方、草刈りをして下さった方・・・．数え切れないほどたくさんの地域の方々の支えがありました。こんなにもたくさんの方々に支えられ、見守られていることを感じながら育った子どもたちは、温かでしなやかな根っこを持った、深く豊かな生き方が出来る人になるのだろうと思います。・・・・・・

この様に、学校での活動に、保護者も一緒に参加させて頂ける環境は、子どもだけでなく、同時に、私たち保護者も、多くの事を学び、成長させて頂くことになりました。

PTA 活動については、長く続く地域ならではのやり方、暗黙の了解というのがあるために、そこをなかなか理解できずにぎくしゃくしてしまう事、戸惑うことがありました。一見合理的でないと思うやり方も、長い経験の中でそうした方がうまくいくという結論である事もあり、そこは、特認として通わせてもらっている立場上、介入しきれないつらさもありました。

けれど、結局は地元や特認という枠組みよりも、一個人としての関わりの中でお互い寄り添いながら相手の話に耳を傾けつつ、対話しつつ信頼関係を築けるかどうか？というところが大事になってくるのだと思います。まだ、信頼できる地元の方に相談しながら、どうしたらより子どもたちのためになるのか、また、地元の方々にも理解を得られるのかを考えて、いい意味での根回しをすることが、手間はかかるし遠回りなようだけれど、大事になってくると思います。

９．先進事例紹介

（１）　和泉市立南横山小学校（2006 年度～特認校）　17 年度：94、18 年度 93

児童数推移　2010 年度 87⇒11 年度 84⇒12 年度 88⇒13 年度 86⇒14 年度 71

特認比率　2018 年度：校区 26、特認 67

山間・谷合・急傾斜地の集落・・・市街地と隔絶した恵まれた自然環境を活用した教育活動

自然環境活用、地域の歴史・伝統工芸学習、学校林活用

公共交通機関実質的になし…スクールバス

中学校進学（選択可）

横山小学校、槇尾中学校と統合再編して義務教育学校化への方向性？　　**もったいない！！**

（２）　神戸市立藍那小学校（2012 年度～特認校）　17 年度：53、18 年度：46

児童数推移　2010 年度 13⇒11 年度 9⇒12 年度 17⇒13 年度 22⇒14 年度 24⇒15 年度 39⇒16 年度 45
⇒17 年度 53⇒18 年度 46

特認比率　2018 年度：校区 1、特認 45

農村地域（藍那、小河の隔絶した二地区が校区）

自然環境活用、地域の歴史・伝統工芸学習

藍那小学校の将来を考える会⇒学校支援の会「まりの会」の継続的活動　**住民自治、地域が支える学校**

神戸電鉄藍那駅（徒歩５分）…公共交通機関の存在　　中学校進学（居住区）

（３）　名護市立緑風学園（久志小・中学校）(2012 年度４小・1 中統合による開設時～特認校）

17 年度小 98、中 52、18 年度小 108、中 48

児童数推移（小）2010 年度：117⇒11 年度：100⇒12 年度 91⇒13 年度：94⇒14 年度：90

生徒数推移（中）2010 年度：45⇒11 年度：54⇒12 年度：53⇒13 年度：63⇒14 年度：63

特認比率　2018 年度（小）校区 79、特認 29、（中）校区 33、特認 15　（小・中）校区 112、特認 44

農山村、漁村地域

特認⇒新区（ミック）　　児童生徒を 10 地区に割り振り、地域で活動

4 小学校・1 中学校統合＆**二見以北 10 地区（名護市東部）を校区とする小・中一貫教育校**

学校運営協議会（2018 年度設置）の有効機能…学校づくりと地域づくりの公的協議組織としての役割

中学校進学（一貫校のためそのまま）

公共交通機関なし・・・保護者の送迎、スクールバス

（４）　宇都宮市立城山西小学校　17 年度：92、18 年度：102

特色（小規模特認校としての五つの約束）

…会話科、文化人による授業、地域連携、安全でおいしい給食、放課後活動（こがし桜スクール）

児童数の推移　2010 年度：95⇒11 年度：93⇒12 年度：91⇒13 年度：94⇒14 年度：94

特認比率　2018 年度：校区 39、特認 63

農村地域

自然環境活用、地域の歴史・伝統芸能学習、**芸術家による指導（書、陶芸、彫塑、箏、ダンス）**

こがし桜スクール（放課後・長期休業中活動）

移住促進（宅地分譲）・・・NPO 法人「自然大好きｅ―街づくり」29 区画完売・入居済み＋新規 4 区画

古賀志の孝子桜まつり（2019 年度で第 17 回）　　中学校進学（選択）

公共交通機関なし・・・保護者の送迎

支援組織・・・魅力ある学校づくり地域協議会、ＰＴＡ、城山西小と地域振興を考える会、

カタクリの会、古桜会、古賀志の孝子桜愛護会

★監修・城山西小と地域振興を考える会、国際総合企画株式会社編集『小さな学校の大きな挑戦～廃校の危機から脱出中～』宇都宮市立城山西小学校、2006 年。

★監修・宇都宮市立城山西小学校創立 140 周年及び小規模特認校 10 周年記念事業実行委員会、国際総合企画株式会社編集『続・小さな学校の大きな挑戦～小規模特認校のキセキを明日へつなぐ～』宇都宮市立城山西小学校、2015 年。

★映画：ドキュメンタリー映画「奇跡の小学校の物語　この学校はなくさない！」安孫子亘監督（2018 年完成）

（５）宇都宮市立清原北小学校　17 年度 123、18 年度 121

児童数の推移　　2010 年度：125⇒11 年度：124⇒12 年度：125⇒13 年度：121⇒14 年度 119

特認比率　　2018 年度校区 62、特認 59

農村地域、工業団地

特色…会話科、**文化創造（夢育劇場）　　学校教員が地域題材を活用して文化創造**

(2017 年度)【ミュージカル】未来へ向かって笑顔でつなごう，わたしたちの鬼怒川

【 劇 】船頭物語 2017

【ふれあい音楽】木管五重奏『あんさんぶる　Mash-t』with きよきた音楽隊

放課後等活動…ＫＡＳＡ:Kiyohara - kitasho After School Activities　清原北小学校放課後等活動

１０．地域住民の活動～「藍那小学校の将来を考える会⇒まりの会」～

（「まりの会」役員からの聴き取りと議事録より）

（１）藍那小学校の将来を考える会

●「2011 年度以降数年にわたって入学者がいない」⇒閉校の恐れ

2008 年 11 月 15 日「藍那小学校の将来について考える会」開催　　当時在籍 17 名

2008 年 11 月 27 日「藍那小学校の将来について考える会」報告

藍那校下自治会長、藍那育友会長、藍那小学校長、連名

●「藍那小学校の将来を考える」委員会発足　　2008 年 12 月

自治会、育友会、保護者＜1 年、2 年、3 年、幼稚園、未就園＞、オブザーバー…神戸市教育委員会学校計画課課員、校長）

・第 1 回委員会…2008 年 12 月 13 日（土）～　・第 49 回委員会…2011 年 4 月 16 日（土）

★小規模特認校制度導入についての住民（全戸）アンケート調査（2009 年 1 月 3 日全戸配布）

●藍那小学校の将来を考える委員会　臨時委員会、2009 年 2 月 1 日（日）20 時～22 時

★「アンケートの結果から、「賛成は多いが反対も少ないとは言えない」状況であるが、委員会としては小学校を特認校制度等、残す方向での働きかけていく。特に、一任が多いことから、我々が任されていることであり、会議（話し合いの繰り返し）が重要である。」（臨時委員会議事録、2009 年 2 月 1 日）

＜具体的な活動のテーマについて＞

・自給することを売りにする。米であるとか、野菜を住民で管理
地域によってはカニなど小学校に振舞ったりと特産がある。学校給食で地域のものを出すのがいいのでは？

・国営公園の絡みで実施することは、不可能なのか？⇒藍那・小河で実施すべき

・地域おこしのなかで藁細工、竹細工、炭焼きなどの環境を整えていく。・若い者でできるのか、老人会や有識者の協力が必要。

・イベントは小学校を中心に行っていくようにする。・だいこんやはくさいの出来る過程を例えに子どもの学習にどうか。

・会計についてはどのようにするのか⇒学校（育友会）の費用・・・それに頼るのはどうか。個人負担も止むを得ないと考える。

・学校林を活用できないか？⇒管理について検討が必要。

・藁細工の藁を学校で保管している。活用できないか（藁細工について検討）。

・親子で自然ツアーを開催　　かぶとや水あそび季節に応じた

・早急に計画、立案し春休みまでに 1 回なにか 1 つイベントを実施したい。会としての活動をアピールする必要がある。
まずは地域へ、そして地域外の方へ。

・流しそうめんなど。春は花見大会。ヨモギもちがいいのでは。もちつきもイベントになる。
材料や道具など協力を得ることが必要。

・地道でも一人ひとりに声を掛けて、近隣住居者を呼び戻す。学校だけでも来てもらう。

・夏ごろに小学校の適正人数が出ることから早急に活動する必要がある。

・内にも外にもするために広報誌が必要である。まずは地域へのアピールが一番。

・うどん祭り　そば作りを行う。将来的には藍那産で出来ないか？

・第一回は 3 月終わり頃　3 月 28 日 29 日　　4 月 4 日 5 日の土日使う

・条件は小学校で行う、子供と一緒、小学校の見学、無料であること

・2 月 6 日（日）までに、イベント、ホームページの題名や構成、広報誌、会計等予算について各自検討してくる。

（藍那小学校の将来を考える委員会　臨時委員会議事録、2009 年 2 月 1 日）

●「藍那小学校の将来を考える会」委員会（第４回）、2009 年２月６日（金）

★具体的な活動方針

・どこ（誰）に向けてアピールするのか。⇒まずは地域内へ、協力を得て地域外の方へ

・委員会も活動をはじめて、具体的な内容の報告がない。地域内外へ活動内容などを早急にアピールしていく必要がある。

・（前回までの議事結果から、教育委員会への特認校申請について）

⇒教育委員会から何かできないのか（藍那小学校が特認校になった際にどれくらいの希望があるかなどの他校へのアンケート）

・・・現在のシステムでは混乱を避けるため不可能である。まずは、地域をあげて向かいいれる体制作りが必要である。

地域がこのままでは何もできない。申請を出しても過去と同様に、地域力が無くては破棄されるのみである。現在は、地域の活性についてもどのようにしていいのか手探り状態であるが、これを打開し地域と一体になる必要がある。結果はわからないがやらなくてはならない。

・地域に関心を持ってもらえるイベントを開催する。…内容はまず特色　古い歴史があるや自然を生かしたこと

一回目のイベントとして春休みに１回実施する。

・育友会（保護者）だけが実施では不可能。…今後ふれあいまちづくり協議会の結成もありみんな集まって参加するようにする。

・里作り（国営公園事業）についても広報の場として協力を得る

⇒実際米作りの際に小学校利用の協力要請もあり、お互い協力し合っていきたい。

・イベントについては、３月の終わりに実施する。国営公園の春祭りの際に、同日に実施し集客数を増やすのはどうか。

・藍那太鼓の会をつくってはどうか、アピールに役立つ。…子供の負担もあるが藍那太鼓（可能であれば）の披露は効果がある。

国営公園の秋祭りに実施、地域内外にアピールする。

・藍那小河地域の他の団体と共に実施する。　　・第１回目は学校で地元の方を対象に実施するのはどうか。

・今後、先のことを考えると、初めにしっかりと意識付けをしておく必要がある。地域住民の現実を知るためにも地域住民には一度集まって頂く必要がある。　⇒住民集めが出来ないようでは、行えない。

・決められた人（賛成）の中で賛同を受けても、それではいけない。

同窓会をしてはどうか。⇒同窓会では限定になる。藍那小学校に関連した方を集めて実施する。

・藍那小学校で「花祭り」と題して人を集めて藍那小学校を見直してもらう。イベントに合わせ、木造校舎や教室の見学等実施。

★第１回目のイベントは　３月 28 日（日）実施予定

（「藍那小学校の将来を考える会」委員会第４回議事録、2009 年２月６日（金））

●「藍那小学校を知ろう」イベントの企画・開催

★「新たな発見を求めて！」（まりの山散策と校舎見学、お茶とよもぎ団子）（2009 年３月）

★「藍那小学校木造校舎見学と藍那うどんまつり」（2009 年７月）

★「藍那小学校と里山めぐり」（2009 年 10 月）

●小規模特認校についての学習（六甲山小学校見学など）

●特色づくりの検討・・・地域がどのようにサポートするか

●「要望書」（特認校制度導入）作成・提出　　2009 年 11 月 24 日

⇒受け入れられず（2010 年３月３日の第 22 回委員会で市教委は特認制導入についてさらなる検討を要請）

★署名活動を踏まえた要望書提出の取り組み（2010 年度）

2010 年７月 25 日締め切り　「神戸市立藍那小学校の特認校認可を要望する署名」（別紙資料参照）

●藍那小学校同窓会の開催（2010 年８月 14 日）

●移住者促進の個別訪問

●2010年12月19日　第38回委員会において、神戸市教育委員会からの回答

・早ければ2012年度からの特認制度導入に向けて前向きに検討する

・他の地域から児童を受け入れることについて、もう一度よく考えて地域としての結論を出してほしい

★第39回（2010年12月26日）、第40回委員会（2011年1月8日）で検討

・「特認校」に向けて進んでいくことで議決する。

・自治会、地域への特認校化に向けた説明会

●「藍那小学校の特認校化に向けた説明会の開催について」・・・5者連名

将来を考える委員会会長、育友会会長、藍那・小河ふれあいのまちづくり協議会委員長、藍那自治会長、小河自治会長

・「平成24年度までの流れ」表作成

●「藍那小学校の将来を考える会」委員会（第43回）2011年2月2日（水）20時～22時30分

★地域がどのようにサポートするか

・教育委員会から3月からのパブコメに必要なため、藍那小学校の特色ある教育内容について、明日（2月3日）の提出を求められているとの連絡事項があり、提出予定の**「あいなプラン」**（別紙）について、参加の委員で確認を行った。

別添：**地域としての役割（案）**から話し合う⇒第44回（2011年2月8日）の委員会で**「学校と地域とのふれあい活動」**に変更

・地域が学校を支えていくということ・地域全員が育友会員である。・運動会などの学校行事は地域住民も参加。

・住民の学校存続と地域活性への思いから、特認校に向けて活動している。

これらのことから、地域と学校との連携をさらに強め、学校と共に発展していく地域を目指していく。

①　学校行事を一緒に行う。…運動会の住民参加（各団体からの参加）、学習発表会（音楽会）の住民参加

②　地域の特性を活かしたプログラムの実施（住民共同参画型教育）

・野菜作りやコメ作りの指導

⇒（学校から）米作りによるサポートが必要。また、学習園で各学年での野菜作りを行う予定。職員では手が足りない。地域の方のサポートをお願いしたい。いちご、じゃがいも、たまねぎを育てている（現在は管理員さんが指導・管理しているが転勤もあり、全く農業経験のない方となる可能性がある）。

⇒蛇谷のあたりで田んぼをできないか。候補を探し検討する。

・防災コミュニティーでの防災教育　　・炭焼き体験（前田雅・岡本賢・小寺）　　・陶芸指導（小河窯、親和大）

（地域の伝統行事の継承）

・わら細工の会、昔遊びの会、左義長、焼きいもの会　3世代での交流

⇒うち左義長については地域の行事とし住民参加で行う。（防コミ、消防団の協力）

・サマーキャンプ（親子でキャンプ、朝の虫取りなど、テレビやパソコン、テレビゲームの無い環境での親子の絆育成）

③　食育

・現在提供されている畑に加えて、地域の使われていない田畑を学校田として提供

・子どもたちが栽培、収穫した野菜やコメを学校給食に利用

④　自然環境の保持、整備

・校内清掃、通学呂周辺の清掃活動、川の清掃（クリーン作戦）

⇒クリーン作戦の1回を藍那小河共同で実施し、小学校の清掃、環境整備を住民で行う。

・学校林の整備→植物園のように植物に名札をつけ、遊歩道のように整備する。

⑤　周辺支援

・安全パトロールの実施、あいさつ運動

・地域福祉センターでの下校後の児童の預かり、子ども会との連携

⇒専門の方（主任指導員）を雇い運営、学童クラブとして神戸市の補助金が利用できるのでは？

⇒市民図書室の利用時間変更で行えないか？etc

・空家の提供、農業ができる土地の貸し出し

⇒空家の持ち主の方も、他からの方へ貸すのは抵抗があり、現状は不可能。実際に要望があった場合に支援する。

⑥　生涯学習や社交の場として活用　　・グランドゴルフ、講演会、うどんまつり、盆踊り（地域以外の親子も参加）

・サンデースクール（親子参加・父兄向けの教育）など。

⑦　その他　　・国定明石海峡公園（里山公園）との連携、地域ＮＰＯとの連携

「あいなプラン」について確認　　（「藍那小学校の将来を考える会」委員会　第43回議事録、2011年2月2日（水））

（２）まりの会

●藍那小学校の将来を考える委員会⇒新しい組織の準備　　活動内容の検討、会則

「まりの会」説明会　2011年4月9日（土）　　第1回総会　　2011年4月23日（土）

会員：藍那・小河両自治会長、育友会会長。藍那小学校教頭、旧「藍那小学校の将来を考える委員会」委員、その他、役員会が入会を認める者

賛助会員：藍那小河ふれあいのまちづくり協議会代表者、校下防災福祉コミュニティ代表者、藍那婦人会会長、ほほえみ会会長、藍那消防団団長、小河消防団団長、里づくり協議会代表者、学校施設開放委員会代表者、市民図書室代表者、その他役員会が入会を認める者

会の目的：藍那小学校の特認校制度の支援、小学校と校下（藍那・小河）の連携、地域の活性化

★「まりの会」の活動

・藍那小学校特認制度の広報

・学校公開日のポスター作製と掲示

・学校公開会日のイベント（里山散策）

・うどんまつりの企画・実行、学芸会への参加・準備

・移住促進の活動（地域の子どもを増やす活動）…個別訪問、空家調査

・各団体からの連絡・調整

★2011年度　定例会15回開催　★2012年度　定例会13回開催　★2013年度　定例会10回開催

★2014年度　定例会7回開催（第6回定例会で、定例会は年6回とする）★2015～2018年度　定例会6回

≪主要な活動の定着・固定化≫

・総会（4月）　・里山散策（6月）…藍那小学校の特認説明会の日に　・うどんまつり（7月）

・クリーン作戦（8月）　・学芸会参加（11月）　・里山保全活動（11月）　・左義長（1月）

１１．小規模特認校制度の課題

（１）小規模特認校選択の機会均等性、階層性　←　学校選択制

希望する者すべてが応募できるのか？（定員による制約はやむを得ないが）…経済的文化的階層

（２）教育課程・教育内容の妥当性、偏向　←　学校選択制

スポーツ、それも特定の競技に特化した教育活動や特定内容（英語など）の学習偏重によりゆがんだ教育活動を実施する恐れはないのか？

（３）保護者（特認制度利用の）の意識・・・生産者（学校づくりの主体）か消費者（学校商品購入者）か

（４）特認利用者の増大（校区の子どもの稀少化）と学校存続の意義

校区に移住者が増加するなど、地域振興が伴わないと、魅力ある小規模特認校では、校区の児童生徒が限りなくゼロに近づいていくことが予想される。実際にそのようになっている学校もある。

しかし、移住者の増加は、地域住民の努力を超えた課題でもある。自治体の施策が不可欠である。どのような施策が有効であり、そして、住民にはどのような取り組みが求められているか？

また、校区の子どもがゼロになった場合に、その学校の地域における存在価値は何か？

（５）特別支援学級設置（特認利用者のための）の適否…校区に特別支援学級を必要とする子どもがいない場合

（６）通学費補助の適否、妥当性

前述の（１）と密接にかかわる問題である。機会均等性の保持と階層性の緩和のためには、通学費の補助は有効な措置であるが、一方で、通学区制との関係をどうするのか、難しい点がある。すなわち、本来、就学すべき学校に就学せずに、児童生徒と保護者が自らの意思であえて遠方の特認校への就学を選び、それに伴い交通費が発生することに対して、補助を行うことが適切なのか？

（７）就学援助制度（とくに通学費補助）の適用の可否…特認利用の児童生徒一般に対する通学費補助は措置しない場合でも、就学援助制度の適用児童生徒が存在した場合に、通学費補助を適用するのか？

（８）中学校への接続問題・・・特認校（小学校）の校区の中学校への進学が可能か否か、その教育的位置づけ？

（９）地域を離れることによる人間形成への影響

居住地域を離れて特認校で学ぶことにより得られるものが大きいとしても、居住地域の子どもたちと学び交流する機会を失うことは、当該児童生徒の人間形成上、負の影響はないのだろうか？

(10) 学校運営協議会の可能性

地域や保護者の学校教育活動への支援が手厚く行われている小規模特認校において、学校運営協議会を設置した場合にどのような効果があるのか？あるいは効果は期待できないのか？

★名護市立緑風学園　★京田辺市立普賢寺小学校

(11) 教員、教職員組合は小規模特認校制度をどう考えているのか？